

三国川ダムの観光資源化による 地域活性化への取り組み

浅井 柊人¹・見田 弘幸¹・中嶋 邦博¹

¹三国川ダム管理所 (〒949-6741 新潟県南魚沼市清水瀬686-59)

「地域に開かれたダム」として年間約3万人の観光客が訪れる三国川ダムでは、独自の活動の他に地域と連携した活動等、多様な広報活動を実施しており、その事例の紹介を行う。

キーワード 三国川ダム、広報活動、観光資源、インフラツーリズム

1. はじめに

三国川ダムは洪水貯留、流水の正常な機能の維持、水道水の供給、発電の4つの目的からなる多目的ダムである。ダム地点における計画洪水流量1100m³/sのうち1000m³/sを洪水貯留する機能を有し、一日最大76000m³の取水や、最大出力9100kWの発電を行っている。

これらの機能に加え、ロックフィルダム本体そのものの美しさやダム湖周囲の四季折々の変化に富む景観、ダム堤体上から見下ろす里山の風景など、地域を代表する景勝地として年間約3万人が訪れる地域住民や観光客の憩いの場となっている。1993年には「地域に開かれたダム」として、ダム湖及び周辺区域の利用を促進し、地域の活性化を図ることが適当と認められ、ダムの役割や魅力を地元だけでなく、全国の人々に伝えるために様々な広報活動を行ってきた。これは公共施設や土木景観を観光資源と位置づけ、実際に現地へ赴き観光旅行する行為である、インフラツーリズムの一環といえる。このインフラツーリズムにはその地域に観光客を呼ぶことによってインフラだけではなく、その地域の観光資源・飲食店等にも立ち寄ることによる地域活性化への側面も持つ。

向上を図った。また、2019年度は職員によるガイド技術向上のため、市内の観光ガイドを講師としてお招きし、座学と実践実習を行った。座学においてはガイドの心得として、挨拶・自己紹介の方法、言葉遣いを学習し、実践実習においては実際に職員がダム案内を行い、それについて講師の方からよい点や改善点などを指摘していただき、資料をまとめるなどして、各個人のスキルアップに努めた。具体的な例として座学においては、数字を抽象的なもので終わらせるのではなく、身近なものでとえること、実習においては誘導の際に足下の悪いところはこまめに声かけをするなどの助言があった。

また、観光とは直接関係ないが市内及び流域内の小中学校からも総合学習の場として毎年見学者を受け入れている。下流域を水害や渇水被害から守るための三国川ダムの役割を知って頂くための貴重な機会となっている。



図1 ダム案内(監査廊)

2. ダムの観光化としての取り組み

(1) 監査廊の一般開放

ダムとダム周辺の自然を観光資源とするために、4月末から11月までの月・木・金曜日に1日4回、土・日曜日・祝日に1日5回、監査廊を含むダム情報館の見学会を実施しており、2016年度からはチラシを作成し、近隣市町の宿泊施設、地元観光協会等にも配布し、知名度の



図2 総合学習

(2) ホームページ・Twitter

ホームページは、イベントの開催や市道・県道の開通などの情報を職員が更新している。またホームページ上では、ダム基礎的な知識、完成までの歩み、周辺の文化や歴史・観光情報、などが常時公開されている。その他にも自然越流の様子や秋の紅葉の様子など普段は見ることのできない動画を視聴できる。

また、2020年3月からTwitterを開発して、ホームページと同様の内容を発信し、それに加え、ダムの旬の話題を随時提供し、ダム来訪のきっかけづくりとしている。

(3) ダムのライトアップ

「森と湖に親しむ旬間」と夏休み期間に合わせて7月から8月末までの金曜・土曜・日曜・祝日の日没から21時まで、ダムの管理用発電の電力を使用し、ライトアップを行っている。また、ダムのライトアップに合わせて三国川ダム管理所正面玄関付近にあるモニュメントの照明も点灯させている。

3. ダム愛護団体と連携した取り組み

水源地域の自立的・持続的な活性化を図ることを目的として、2004年に「もっと楽しく、もっと元気に」をテーマに「三国川ダム水源地ビジョン」が策定された。これを受け、三国川ダムを利用した、地域づくり活動を継続的に発展させていく組織として、「しゃくなげ湖畔を楽しむ会」が設立された。2017年3月には北陸で初めてのダムの愛護団体に認定され、三国川ダム管理所と共に様々な活動を行い、市内外のダム来訪者に三国川ダムの役割等を発信している。

(1) しゃくなげ湖畔新緑ウォーク・紅葉ウォーク

毎年5月に新緑ウォーク、10月に紅葉ウォークを開催している。春は新緑を、秋は紅葉を楽しみながら、ダム湖周辺を1周するイベントで、例年10km程度の距離を歩く。ウォーキングが終わると、最後はスタート地点である観光センターで名物のダムカレーを試食していただく。

(2) 花植え

毎年6月に三国川ダム湖天端周辺の景観整備を目的にボランティアを募り、花植えを行う。例年900株程度のペゴニアの花苗を用意し、プランターに移植し、管理所の正面玄関、ダム天端などに配置する。



図3 Twitterアカウント



図4 ダムライトアップ



図5 新緑ウォーク



図6 花植え

4. 地域と連携した活動

(1) サイクルフェスタ

南魚沼市が力をいれる、食と自転車を繋げた秋の一大イベントで、三国川ダムをコースとしたロードレースが年に2回、9月に開催されている。ダム湖周辺は景観が素晴らしく、アップダウンにとんでいることから非常に人気の高いコースになっている。

a) グルメライド

例年1000~1500名程度の参加が見込めるイベントになっており、2019年度は約1400名の参加があった。このレースでは南魚沼市の地元グルメがエイドステーション(エイド)で味わえるロングライドイベントになっている。実際のコースは65・80・100kmの3コースがあり、参加者が自分にあった距離を選択できるようになっている。この3コースのうち100kmコースに三国川ダムが含まれている。また、昨年度のエイドでは、きりざい井、米粉のカレーうどん、南魚沼産コシヒカリのおにぎりといった地元の名産品をつかったグルメが振る舞われた。

b) JBCF南魚沼市サイクルロードレース

JBCFサイクルロードシリーズという日本の自転車ロードレース競技選手・チームが参加する全国地域で開催される年間大会シリーズの一つで、ダム湖を周回する大会になっている。E3~P1(JPT)のカテゴリーがあり、自分に合ったカテゴリーに参加することができる。さらにP1(JPT)はJBCFサイクルロードシリーズのトップカテゴリーで国内トップレベルのチームや選手が参加するレースとなっている。

(2) コミュニティFM

地元南魚沼市のラジオ局である、「FM ゆきぐに」で当ダムの洪水調節方法やその効果、洪水期におけるダム放流による水難事故防止等の注意事項並びに、ダム周辺のイベント情報等の紹介など、ラジオ放送を通じて南魚沼地域の住民に広く周知し、ダム来訪のきっかけづくりをしている。

(3) しゃくなげ湖まつり

毎年7月に「森と湖に親しむ旬間」の活動の一環として、しゃくなげ湖まつりを開催している。このイベントでは、屋外ステージ、模擬店、魚のつかみ取りなどが行われている。管理所ではこのイベントの最中に監査廊案内と巡視船の体験会を行っており、こちらは毎年人気の催しになっている。

(4) ダムっ湖

毎年夏と秋に南魚沼市報に同封して発行しているダム専用の広報誌である「ダムっ湖」では、洪水期の注意喚起のアナウンス以外に、各種イベントの告知、洪水期を

終えてのダムの洪水調節効果の報告などを掲載している。

(5) インフラツアー

全国でインフラツアーが人気なことを受けて、南魚沼圏域にあるインフラの重要性を知って頂くことを目的に、2018年より、三国川ダム、大源太川第1号砂防堰堤(湯沢砂防事務所)、関越トンネル、奥清津発電所を巡るツアーを地元観光業者との共催で実施している。

(6) 湖面利用

三国川ダム周辺の魅力あふれる自然環境を生かした取り組みをさらに進めるため、三国川ダム湖を、安全に、もっと楽しく使っていただき、地域をもっと元気にすることを目的に2020年1月に「三国川ダム湖面利用協議会」を立ち上げた。これにより三国川ダム湖利用の規則等が定められ、水源地域の振興と活性化、水質の保全等が可能となった。この活動のきっかけとなったのが、SUP(Stand Up Paddleboard)になる。三国川ダム湖では2019年7月末から9月末までの約2ヶ月間の活動で約100名の利用があった。

SUPはハワイ発祥のウォータースポーツで、ボードの上に立ち、パドルで水面を漕ぎ進んでいくアウトドアアクティビティである。SUPは新潟県内だけでなく、全国各地で行われており、比較的簡単にでき、あらゆる環境で楽しむことができるため、性別を問わず幅広い世代の人が楽しむことができるスポーツになっている。



図7 グルメライド



図8 JBCF サイクルロードレース



図9 インフラツアー



図10 SUP(Stand Up Paddleboard)の活動風景

5. 来場者の推移

図11には三国川ダムの監査廊見学者、ダムカード配布枚数、情報館来場者数を示す。

監査廊見学者に関しては2011年から2016年までは年々ほぼ一定の割合で増加している。その後2017年に加を見せ、2018、2019年はやや減少している。

ダムカード配布枚数は2011年から2019年にかけて常に上昇しており、2017年に急激に増加し、その後も増加を続けた。

情報館来場者数については近年4年分のデータとなるが、こちらも他の項目と同様に2017年に急激な増加があり、その後はほぼ同程度の来場者数を維持している。

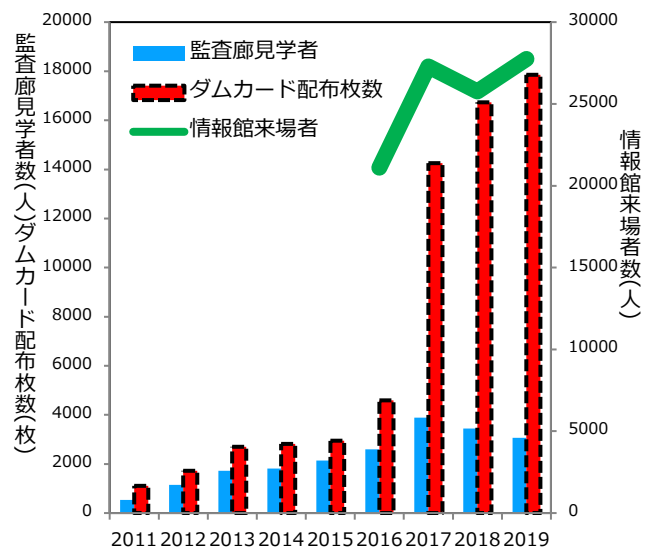


図11 来場者数の推移

6. まとめ

ここまで、三国川ダムの観光資源化としての取り組みを紹介してきた。三国川ダムでは、ダムの役割や機能を紹介・説明する活動とダム湖を利用したイベント活動を行ってきた。図11からも読み取れるように、ダムカード配布枚数は年々増加傾向にあることから、三国川ダムの観光資源としての成果は出ているといえる。また、2017年に急激に増加した後、減少傾向が見られた監査廊見学者数・情報館来場者数においても2016年と2019年を比較すると、監査廊見学者は約1割程度、情報館来場者数は約3割程度の増加があり、高速のSAや道の駅、地元観光協会、旅行会社等に監査廊見学のチラシなどを配るなどといった過去の広報活動の成果が実ったものだと考える。これによって、インフラツーリズムの観光資源としての役割も果たすことができ、地域経済に貢献できていると考える。

今後、三国川ダムの課題として、更なる「地域との連携」があげられる。三国川ダムには例年多くの観光客が訪れる。そのため周辺地域の観光資源・施設と連携し、南魚沼地域全体の来訪者数を増やすこと、一人当たりの滞在時間を延ばすことで飲食店や宿泊施設等への還元もあり、地域の活性化につながるのでは無いかと考える。

参考文献

- 1) 国土交通省インフラツーリズム拡大の手引き-試行版-
<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/infratourism/00pref/000.tebiki.pdf>